文苑

旅のすさび

鷺水

都をたちいでゝ那須野
が原をすぎける
ふしなへて世をうき旅とよの人の
想ひなすのか原をすぎけり
松島につきける頃
空かきくもり雨さへ
しきりなり
はれやらぬ雲の絶間をまつ嶋や
嶋よりさきにしまはありけり
猶ふなし處にて
藻鹽やく海士の小舟の遠く近く
漕ぎゆくかたに嶋のかずゝ

七戸といへる處より
一里ばかりゆきて
とある農家に宿り
ける夜よめる
旅枕夜半にも鐘のきこゆなり
人里遠き草のいほりに
青森より都へ歸る日を
知らせける文の内に
つみためし心のはなのひもとかは
われはたいかに樂しかるら舞

親しき友に

木の下　いつ子

君よ泡さく紫の
神の酒甕を身にしめて
あまき天甕の花の香に
とこ世の春を求めずや
見よひんかしの空高く
とこ笑むほしの影若み